



2015/06/01

夏号

Create

-くりえいと-

おとな高校創作部

<http://sousaku.iinaa.net/>

目 次

目 次	1
お知らせ	2
<div>小 説</div> 彼女と僕の関係 / 鈴神小鳥	3
<div>ゲーム</div> K a n i	14
<div>イラスト</div> 神名雨	16
フリートーク	17
後 書 き	20

表紙イラスト：神名雨

No.003 **Create** 一夏号一

公開日 2015.06.01

3の倍数月に部誌発行中！

おとな高校 創作部

<http://sousaku.iinaa.net/>

お 知 ら せ

① 夏号公開日が遅れのお詫び

諸事情により夏号の公開が遅れてしまいました、大変申し訳ありません。

リアルな活動が忙しく中々手が回らない状況ではありますが、創作部は続けていきますので暖かく見守っていただけると嬉しいです<(_ _)>

作業のお手伝いをしてくださる方、随時募集中です。

② 新入部員募集のお知らせ

長らく募集を停止していましたが、このたび新たな部員を募集することになりました。入部希望の方は創作部サイトのメールフォーム、もしくは部長・鈴神小鳥に直接メールください。

[連絡先：hiroro_12@hotmail.com]

今後どうぞ、おとな高校創作部をよろしくお願いいたします

部長 鈴神小鳥

「彼女と僕の関係」

鈴神小鳥

チャイムの音と、ざわつく教室内。

「さようなら」の合図とともに「我先に」と帰宅していく根暗な連中が、今日も慌ただしく出て行った。そんなに急いで、いったい家で何が待っているというのか。

彼らが出ていくのを見届けたあと僕も鞆を手にとって、「よっこらせ」と年不相応な掛け声とともに腰をあげた。もう特にここに残る用事もない。

「あっ」と声をあげたのは、斜め後ろの席の日向さんだ。いつも明るく、容姿端麗。男女共に彼女のファンは多いと聞く。ぼくは彼女を見ると何故か、正体不明の不安に駆られるのだが。

僕が声のした方を振り返ると、日向さんは慌ててこちらへ駆け寄ってきた。

「ねえ、豊嶋くん」

「？」

「噂で聞いたんだけど……」

彼女は少し言いづらそうに口ごもり、やがて僕を見上げて言った。

「鈴木さんと付き合ってるって本当？」

彼女が首を傾げる。人懐っこい視線がねっ

とりと絡みついてくる。僕は湧き上がる嫌悪

感が表に出ないように、抑える。彼女が悪い

人間ではないことは、重々承知していた。

「……付き合っていないよ」

ただ、事実だけを告げる。彼女の長い睫毛

が、数回瞬きを繰り返した。

「そう……なんだ」

呟いたあと、彼女は顔をほころばせる。

——いったい何だっというんだ。何故そんな

事を聞く必要がある？

無意識の防衛反応なのか、僕は早くこの場

を去りたくて仕方なかった。

「それじゃあ」

背を向けようとした僕を引き止めるよう

に、日向さんは「バイバイ」と控えめに手を

振る。僕も笑顔を作って、手を振り返した。

彼女の隣にいたもう一人の女子がニヤニ

ヤと日向さんをつつくのが、視界を流れてい

った。

夕焼け空の赤い色に包まれた校舎は、生徒

であふれている。いつまでも帰ろうとしない

お喋りな女子たちの間を抜けると、校門のと

ころにいつものシルエットを見つける。

僕は脇目もふらずに、その人物の元へ近づいていく。彼女もまた、僕の姿を見つけたようだった。

僕と彼女は軽くアイコンタクトを交わし、当然のように同じ方向へと歩き出した。

『ねえ、鈴木さんと付き合ってるの?』と、先ほどの日向さんの声が頭をよぎった。

——馬鹿らしい。

「ねえ。古典の課題、いつまでだっけ」

「来週。鈴木さん、もう終わった?」

「……まだ。ちよつと後で見せて欲しいところがあつて」

「ん」

日常というのは実に退屈なもので、小説の中の主人公のように事件に巻き込まれることもなければ、刺激的な出会いなどそうあるわけもない。

そして彼女とのこの時間もまた、退屈な日常の一部であつて、けして特別なものではないということ——僕にとつても、彼女にとつても。

「おじやましまーす」

彼女の家はいつも通りしんと静まり返っ

て、人の気配はない。鈴木さんは僕のことなんて見向きもせず、自分の部屋へと上がっていく。僕はその背中を追った。

彼女の部屋はいつもどおり綺麗に片付いていて、まるで生活感がなかった。

定位置に座る。彼女の興味の詰まった小さな本棚と、まだ夕日の差し込む窓。その間の壁に、小さくなくてもたれかかった。特に居場所を決めているわけでもないが、ここに居るのが一番自然な気がしていた。

鞆を開いて約束通り課題のプリントを鈴木さんに差し出すと、彼女は「ありがとう」

と受け取って、静かに自分の教科書を開く。

彼女の意識はもうそちらに向いてしまったらしい。

さて、どうしようか。熱心にペンを走らせる彼女の姿をぼんやりと眺めながら、僕は考える。

しばらくしてから、鞆の中から本を一冊手に取った。お気に入りの作家の新作だ。しおりを挟んだページを開くと、並んだ文字が僕を知らない世界へといざなってくれる。

こうして僕は、同じ場所で別々の時間を過ごす。やがて日が落ち、あたりがほんの少し肌寒くなるまで。

——これが僕らの日常だった。

どれくらい時間が経っただろうか。

文字を追っていた僕は、ふと部屋の中が暗くなってきたことに気づいた。腕の時計に視線を落とすと、短針はもう7の位置を指していた。彼女の方に目をやると、同じように顔を上げた鈴木さんと目があう。

「じゃあ、そろそろ帰るわ」

そう切り出すのは、僕の役目。

彼女の顔が少し曇った気がした。何か考えているのか、黙り込んでしまう。

「……もうちょっと」

そしてか細い声で一言、そう言った。

「わかった」

その日僕は、日付が変わるまで鈴木さんと過ごした。

* * *

「豊嶋くん」

日向さんは、鈴を転がすような声でぼくを呼ぶ。日がもう高くなった頃、昼休みのことだった。

「話があるの、ちょっとだけ時間いい？」

「ああ」

着いて行く理由も無いが、特に断る理由も見つからない。

彼女に誘われるまま階段を上り、人気のな

い踊り場まで足を進める。屋上に続く扉の前、

普段は誰も寄り付かない静かな空間だ。

目の前をヒラヒラと短いスカートが揺れ

ていた。

「……私、豊嶋くんのが好きです」

——別段驚くこともなかった。たぶん僕は知っていたのだと思う。心は妙に冷静で、彼女の姿をどこか遠くから見ているような気分だった。

「……………」

「私と付き合ってください」

何も答えないでいる僕にしびれを切らしたのか、彼女がもう一度口を開く。

目尻のあたりがピクリと痙攣するのが分

かった。少し頬を染めた彼女の表情が、僕の

イライラを掻き立てる。

けして日向さんが悪いわけではなかった。

けして日向さんが悪いわけではなかった。

僕はゆっくり息を吐く。コントロールしなければ、彼女にひどい言葉を浴びせてしまいうので。

「悪いけど、付き合うとかそういうの……興味ないから」

「……………」

彼女は、不満げに顔を伏せる。

「……なんで」

「え？」

「なんで嘘つくの？ 鈴木さんと付き合ってるって言えばいいのに。そうすれば私だって諦めるのに」

「なんのこと？」

僕は本当に訳が分からなくて、ただ困惑する。彼女は眉をひそめ俯いたままだ。

「見たの、鈴木さんの家に入っていくところ——ああ、なるほど。彼女が何を考えているのか、だいたい見えてきた。

僕はため息を吐く。

「鈴木さんとは、付き合っていない」

「でも！」と、彼女は声を荒らげる。僕は途端に面倒になって、全てを投げ出してしまいたくなった——自分の中で、何かが切れる音が響いた。

「……なんでもかんでも恋愛に結びつけるの、アホらしいと思わない？」

冷たく言い放つ。日向さんがハッと息をのみ、体が強ばらせるのが分かった。こちらまで緊張が伝わってくる。もう、抑えは効きそうになかった。

それでも彼女は、言葉を選びながら絞り出すように言う。

「……でも、鈴木さんはきっと豊嶋くんのことが好きよ。だから遊びなら」

「何を勘違いしているのか知らないけど」

僕はそれを強い口調で遮る。

「君が考えてるようなふしだらな真似は一切してないよ」

ひと呼吸置いて、真っ直ぐに彼女の目を見つめた。

「……それとも君がセフレになる？」

「！」

日向さんは顔を真っ赤にして目を見開く。羞恥心か、怒りか。そのどちらとも言えるかもしれない。彼女はやがてきつく口を結び、その場から走り去っていった。

キラリと、一粒の雫が宙に舞って光った。

僕は彼女の消えたその階段で立ち尽くす。死角になった場所にいて、その人の存在には気づいていた。

「……ねえ、何してるの」

——返事はない。

「ねえ」

もう一度、そう呼びかけると、鈴木さんは静かに僕の前へと姿を現した。そして、僕を見る。

「何でここにいるの」

僕は更に質問を重ねた。いつからいたのかは知らないが、今の話は聞かれていただろう。「……いつも、お昼は屋上で食べてるから」

鈴木さんはそう言いながら、目線で屋上の扉を指した。彼女は必要最低限の言葉しか発しない。

『鈴木さんはきつと豊嶋くんのが好きよ』

日向さんは、僕に言った。

——まさか。鈴木さんが僕が好き？

目の前に立つ彼女を改めて見る。何を考えているのかさっぱり読めないその瞳が、ずっと僕を捉えている。

誰かと付き合うなんて考えられなかった。鈴木さんのことが好きか？ それすらも分

からない。それでも僕にとって、彼女は必要な存在だった。

もし、彼女が望むなら——いや、僕も彼女なら、あるいは。

「付き合おうか、僕ら」

「……………」

「……………」

沈黙。得も言われぬ空気が2人の間を流れて、彼女の顔が一瞬歪んだ気がした。

「……………なんで？」

彼女は鼻で笑う。視線は冷たく僕を見据えていた。

——強い嫌悪を感じていた。ビリビリとはつきりとした感覚になって、肌に伝わってくる。

鈴木さんは僕の横をすり抜けて、階段を降りていこうとする。

考える間もなく、僕の左手は彼女の腕を掴んでいた。なんとなく、このまま彼女が消えてしまいそうで。

「……………」

彼女は振り向かない。
咄嗟の行動だった。

「……好きじゃないよ」

ふと、僕の口から出たのはそんな言葉だった。彼女はビクリと反応して、動きを止める。

「鈴木さんのこと好きじゃない」

「……………」

掴んだ腕から力が抜けていくのを感じた。

彼女はゆっくりと僕の方を振り返ると、ジッと僕の顔を見る。

「私も、豊嶋くんのこと全然好きじゃない」

彼女ははっきりと言い放つ。僕らはしばらくの間見つめ合った。

僕らはどちらともなく距離を詰めて、そつとキスを交わした。

心の中に何か暖かいものが広がっていくのを感じながら。

終わり

Ka 現在制作中のゲームの立ち絵を晒します。

開発度は4%
くらいです(死)



オープンワールド&
フリークエスト制で
自由度重視の旅10
というゲームを
製作してます。

かに

今作の主人公です。
名前はプレイヤーが付けるので
設定名はありませんが、便宜上
『テンちゃん』と呼んでます。
十作目の主人公だからテンちゃん



「こういう感じで3Dマップをウロウロします」

モンスターグラフィックの一部を晒します。



『アースドラゴン』
大地のドラゴン。
なかなか手強そうだ

『巨鳥ディアトリマ』
遙か昔地上を闊歩していた
という絶滅したはずの鳥
まだどこかでしぶとく
生き残っていたらしい



かに



『マエケンサウルス』
二人のマエケンと恐竜が
究極の三身合体！！
これは強敵だ！！！！



しずむ しずむ

どこまでも

神名雨

☂ふりーとーく☂

夏号！参加しました！
夏と言えば女の子が薄着になりますね！
イラストを描く幅も広がります。
たくさん女の子描くぞ！

というわけで…冬号ぶりになります。
この1回休んでは1回登場し…を繰り返す…。
きっと次号は休みなんですね。
これは神名の未来予知です。
外れる事を祈りつつ…頑張り…ます(ガクッ

それではまた次号かそのまた次号で
お会い致しましょう！

神名雨



後書き

こんにちは、鈴神小鳥です。

今回は一旦シグ恋をお休みさせていただきまして、全く別の世界、高校生のお話を書かせていただきました。気分転換にね。といっても安定の恋愛ものですが^^

今回の短編について少し補足。人と人の繋がりはそんなに単純じゃなくて、形にこだわったり、無理にカテゴリ分けしたりしないほうがいい場合もあります。そんなお話。

豊嶋くんと鈴木さんは一般的には理解されない関係ではありますが、彼らなりの方法で少しずつ信頼関係を築いていくのだと思います。それが彼らにとって唯一残された道であり、この二人だからこそその方法をとることが可能だったのかな、と。彼らが出会えたことはとても幸運だと思います。どうぞ末永くお幸せに。

本当は彼らの過去とか、お互いの育った環境だとか。もう少し深く掘り下げたかったのですが、ページ数的に限界が来てしまい断念。また機会があれば番外編でも書きたいと思います。

さて次号はまたシグ恋に戻りたいと思います。どうぞお楽しみに！

鈴神小鳥

フリータイム がねえ!!

5月だというのに暑いですね
今年は4月からクーラー解禁しました
暑がりのかにです

積みゲー増えすぎて大変です
今頃アーシャのアトリエとかやっています。
他にも新品未開封がいっぱい(死)

最近創作イベントのサークル
参加者が右肩上がりだそうで
ついに関西コミュニティアでは落選も
出始めたそうです(汗)
特に漫画以外の創作物は
落選対象なようでゲームで
出ようとしてたかに涙目

6月にも創作イベントあるけど
艦これ東方等のオンリーと同時で
嫌な予感しかない……(参加迷い中)



描きかけのイベント用CG下絵です

おとな高校 創作部

夏号 後書き

こんにちは、部長の鈴神です。暑い！あっついね！今回も無事？部誌を出せそうです。今回随分少ないページ数になってしまい、少し寂しいですが。

さて、創作部1周年も近づきまして。いよいよ新入部員の募集をかけようと思っております。興味のある方はぜひ創作部サイトメールフォームより連絡お待ちしております！

多忙+体調不良で中々創作部の活動に手が回らない日々ではありますが、なんとか部誌発行は続けていきたいと思っておりますので、今後もよろしくお願いします〇〇ページ

皆様もどうぞ体調にはお気を付けて！ではまた。

[次回の部誌発行]

Create 秋号:9月1日 公開

おとな高校 創作部

創作活動を楽しむおとなのための部活動です。
イラスト・小説・漫画・詩・音楽など、表現方法は問いません。
年4回の部誌発行を中心に、ゆったりまったり活動中。

詳しくはHPをご覧ください
<http://sousaku.iinaa.net/>

部員(10名)

【鈴神 小島 / けーすけ / 葉菜 / こんそめ / そらを
神名 雨 / kani / 半泣き / ばしりすく / 白狸】



おとな高校 創作部 |

検 索

2015/06/01

<http://sousaku.iinaa.net/>



夏号

Create

-くりえいと-

おとな高校創作部

<http://sousaku.iinaa.net/>